

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 29 日現在

機関番号：34535

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K10178

研究課題名(和文) Florence Nightingaleの著作におけるクリミア戦争の影響

研究課題名(英文) The Influence of the Crimean War on the Writings of Florence Nightingale

研究代表者

山崎 麻由美 (Yamasaki, Mayumi)

神戸常盤大学・保健科学部・教授

研究者番号：00530304

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：ナイチンゲールの著作『女性による陸軍病院の看護 補助覚え書』(1858)(以下『補助覚え書』)、『病院覚え書』(1858)、『看護覚え書』(1860)はクリミア戦争直後に著された。『補助覚え書』と『病院覚え書』は戦争の報告が基になっており、その2冊には彼女がクリミア戦争体験の著作への影響がよく表れている。『病院覚え書』は3版まで出版されたが、初版と3版では全く内容が異なっている。初版での鍵になる「システム」の欠如が、その後看護のシステムの構築に結びつく。また『補助覚え書』や『病院覚え書』の中で女性による看護が検討され、そして一般の読者向けの『看護覚え書』につながっていった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『女性による陸軍病院の看護 補助覚え書』、『病院覚え書』、『看護覚え書』を別々に論じるのではなく、連続性のある著作と捉え、クリミアでの経験がどのように反映され、そしてどのように形を変えて著作に組み込まれていったかを調査した。ナイチンゲールの書簡と併せて当時の新聞や医師やナースたちが残した文献を調べることで、背景となる病院や医療の状況を客観的に把握することが出来た。特に「システム」と「女性による看護」が鍵であることが明らかになった。クリミア戦争に赴くまでの彼女を取り巻いていた状況と戦争中の活動そして戦後の著作を辿ることでナイチンゲールの思考の影響とその変化とを著作に見ることが出来た。

研究成果の概要(英文)：Nightingale's works, *Subsidiary Notes as to the Introduction of Female Nursing into Military Hospitals in Peace and War* (hereafter *Subsidiary Notes*), *Notes on Hospitals*, and *Notes on Nursing*, were written shortly after the Crimean War. *Subsidiary Notes* and *Notes on Hospitals* were based on war reports and show the influence of Nightingale's experiences during the Crimean War. *Notes on Hospitals* was published in three editions, but the contents of the first and third editions are quite different. The lack of a key system described in the first edition led to the subsequent development of a system of nursing. *Subsidiary Notes* and *Notes on Hospitals* reassessed nursing by women, which led to the writing of *Notes on Nursing* for a general audience.

研究分野：イギリス文学

キーワード：ヴィクトリア時代 女性の自立 女性ナース 看護 クリミア戦争

1. 研究開始当初の背景

フローレンス・ナイチンゲール (1820-1910)はクリミア戦争(1854-1856)下の野戦病院に38人の看護婦を率いて赴いた。そのことで彼女は慈悲深い「ランプを持った婦人」や「クリミアの天使」として本国で一躍有名になった。また彼女は日本でも明治時代にすでにクリミア戦争での活躍で広く知られていた。彼女の偉業はクリミア戦争での看護活動のみではないが、クリミア戦争中の彼女の活動は目覚ましいものがあった。クリミア戦争に赴く前の状況と帰国後の彼女の変化はクリミア戦争での経験を経たからである。彼女がクリミア戦争で直面した問題は多岐にわたり、傷病兵のケア、病院の改善、物質の手配、医師やナースたちとの人間関係などの問題に取り組んだ。しかしイギリス国民に伝わる彼女に関する情報は美化されたもの、誇張されたものが多かった。一方で、終戦後にクリミア戦争に関わりをもつ多種多様な人々が著した数多くの手記や書簡集に記されている戦地での衛生の状態や医療の状況から、ナイチンゲール自身が記さなかった多くの事柄があったことも分かっている。彼女に対する評価もそれぞれの立場で違う。それらの状況や実態を整理し、ナイチンゲールとの関わりを把握することが、彼女とクリミア戦争の関連を明らかにするために必要かと考えられた。さらにクリミア戦争という事象だけを切り取って論じるのではなく、背景としてある当時の社会情勢や文化をも含めて広く検証していくことが肝要かと思われた。

2. 研究の目的

クリミア戦争下の看護・医療に関する事実を収集、検討した上で、ナイチンゲールがクリミア戦後間もなく著した以下の三著作 *Subsidiary Notes as to the Introduction of Female Nursing into Military Hospitals in Peace and War* (1858)* *Notes on Hospitals* (1858) *Notes on Nursing* (1860)を中心に、戦時下での体験が彼女の著作にどのような影響を与えているのかを検証することが目的である。その三著作は戦後まもなく出版されているので、クリミア戦争の影響を辿りやすいと思われるからであり、それぞれ出版年が近いことから、連続性の中で影響の変化を見ることができると考えられたからである。そして彼女にとって何が重要な問題点であったかを抽出し、それをどのような形で著作に反映させているかを明らかにすることで、彼女の看護観が戦時中にどのように形成されていったのか、あるいは戦争前と戦後では変化があったのか、そしてクリミアでの経験がその後の看護や管理等にどのように結実していったのかを検証することを目的とした。

*以下、本書は *Subsidiary Notes* と記す。

3. 研究の方法

文献調査。(1) ナイチンゲールの著作 (2) 一次資料 (3) 二次資料 の3観点から資料を収集分析した。

(1) *Subsidiary Notes* *Notes on Hospitals* *Notes on Nursing* その他の関連書

(2) ナイチンゲールの書簡集。クリミア戦争に赴いていたナースや医師による病院環境に関する手記。クリミア戦争の将校や兵士達の手記。と以外で戦地に来ていた人物達が残した記録。当時の新聞等の記事。⑥ ヴィクトリア時代(1837 - 1901)中に出版されたクリミア戦争に関する著作。ヴィクトリア時代に出版されたクリミア戦争に関する小説・詩歌

(3) ナイチンゲールの伝記 クリミア戦争に関する研究書 ヴィクトリア時代の看護・医療事情に関する研究書 ヴィクトリア時代の社会・文化に関する研究書

以上の資料を用いて 1. 当時のイギリスの社会的背景 2. クリミア戦争時の病院の状況・看護状況 3. 著作にそれらの影響は認められるか、という3点を中心に検証した。

4. 研究成果

以下の区分で検証した。

(1) 当時の社会事情とクリミアへ赴くまでのナイチンゲール

当時看護がレディのする仕事ではないとみなされていたことはよく知られている。そのような社会の中で、ナイチンゲールの苦悩と模索は続いていた。クリミア戦争直前に著した *Cassandra* (1852)には社会の因襲や家族との関係で苦しんでいた様子が描かれている。その中で彼女は自身の苦悩を描いただけではなく、女性が何かを極めて専門家になるために足りない

ものとして「時間」をあげている。当時の社会風潮であった家庭や家族に生きることこそ「女性の使命」という考えをナイチンゲールは批判的に捉え、「使命」をむしろ家庭の外に求めようとしていた。そして「専門職」という考えを持っていたことがクリミア戦争での活動につながっていたことは間違いない。時の戦争大臣であり友人でもあったシドニー・ハーバードは、戦地へ行く前のナイチンゲールに宛てた書簡の中で、クリミアでの彼女の活動がうまくいけば「偏見は打ち砕かれ先例が打ち立てられ、そのことで善きことがずっと増えていくだろう」と記している。ハーバード自身もナイチンゲールが行おうとしていることにはクリミア戦争という特殊な場が必要であると分かっていたのである。

(2) 戦地での実態

傷病兵の悲惨さを伝える従軍記者の記事が発端になって、ナイチンゲールはクリミアに赴くことになった。当時の新聞記事は写真ではなくイラストが添えられていることが多く、「ランプを持つ婦人」のイラストがナイチンゲールのクリミアでのイメージを決定したといっても良い。しかし、ナイチンゲールと共に働いていた人物達の日記や手記は彼女の行動や思想をより真実に近い形で伝えている。特に彼女の下で看護にあたっていたナースたちの記録は貴重である。彼女に心酔していたか、反発していたかによって内容は異なるが、彼女の近くで働いていたナースたちの証言は信ずるにたるものである。彼女と一緒にスクタリに渡った2人のナース(Margaret GoodmanとSarah Anne Terrot)の手記は当時の野戦病院の実態やナイチンゲールの看護方針をつぶさに伝えている。その後第二陣として到着したナースたちやローマカトリックのシスターたちの手記や回想録では、ナースの数が増えたことにより、看護が手厚くなったと同時に、ナイチンゲールがひとりで全体を統率することが難しくなっていったことを明らかにしている。クリミアへ飛ぶ前に、ナイチンゲールが「連れていくナース達は自分の目の届く数にしたい」と考えたことが、いかに正しいものであったか分かる。しかし手厚い看護には、それを行う者の数が多いことも必要であり、そのため彼女は *Subsidiary Notes* では、特に女性看護婦について論じることになったのである。彼女はクリミアで体験したことを基に病院看護婦についての考えを述べている。戦地特有のオーダーリー(看護兵 orderly)やカトリック修道女や英国国教会の修道女そして病院での看護経験のある職業看護婦とレディと呼ばれる者たちを束ねていく上でのシステム構築しようとしていたことが明らかである。

ナイチンゲールと共に働いていた看護婦の他に貴重な記録を残しているのが、医師と患者である兵士(将校)達である。医師達は病院の状況や勤務形態を伝えている。医師の数は多く、記録も多い。イギリスにいる家族への手紙の中にナイチンゲールや看護婦に関する記述があるが、私信の中での記載であるので脚色は少ないと思われる。それらはナイチンゲール書簡や伝記に著された内容を裏付けるものとなった。

(3) *Notes on Hospitals* を取り上げての比較

三冊の著作の中で、一番興味深いのが *Notes on Hospitals* である。この著作は少なくとも三度版を改めており、ナイチンゲール自身が第三版の前書きで「大幅に書き直したためそれまでと違ったものになった」と述べているのである。*Notes on Hospitals* の初版と第三版を比較した。初版は報告書であり、第三版では読者を意識した著作になっている。初版では「病院」はクリミア戦争での野戦病院を意味しており、そこで彼女が行ったことや気づいたことを事実に基づいて述べている。実際初版の前書きには本書はリバプールで行われた National Association for the Promotion of Social Science の会合の講演記録であるとの記載が見られる。さらにこの本の重要性はクリミア戦争中の軍隊とその病院に関する記録というだけでなく、長年彼女が経験してきた病院の建設とその組織に関する基本方針という点からの情報も含まれていることである。初版では彼女は、戦時中は現存のシステムではうまく事が運ばなかったと述べている。また彼女は男性のナースを否定しているわけではないが、女性の方が男性よりも衛生上の家政管理のスキルに長けていると述べ、また女性ナースの方が男性ナースよりも有能であるとしている。第三版の *Notes on Hospitals* は初版のものよりも読みやすく、内容も一般的なものになっている。そこにはクリミアでの経験を広く伝えるという姿勢が見て取れる。

(4) *Subsidiary Notes* から *Notes on Hospitals* を経て *Notes on Nursing* までの内容の共通点と変化

Subsidiary Notes は *Notes on Matters Affecting the Health, Efficiency, and Hospital Administration of the British Army* という500頁を超える著作の『補助覚え書』であるが、130頁を超えており、補助というには量も質も充実した独立した著作と考えることが出来る。この *Subsidiary Notes* にはナイチンゲールが経験してきた看護の様々な形態やシステムから導き出されたが彼女の考えが述べられている。タイトルには「陸軍病院」という言葉があるが、それ以外の病院のナースについても述べられている。男性よりも女性が看護に携わるほうが良いという結論は、オーダーリー(看護兵)との比較で得られた結論である。彼女だけでなく、彼女と共に働いていたナースたちのオーダーリーへの目は厳しい。実際オーダーリーは訓練を十分に受けていない場合が多かった。看護には女性の方が向いているという事と、訓練が必要であるという事はオーダーリーとの経験から導き出されてものでもあると思われる。また *Subsidiary Notes* には女性が看護に携わる際の注意点や条件などが細かく記されている。

Notes on Hospitals の初版は先に述べたように、事実に基づく報告書の意味合いが強く *Subsidiary Notes* と共通点も多い。そしてその 2 冊を経て *Notes on Nursing* へと向かう。そこに著されているのはクリミア戦争での体験をもとに女性が看護することの意義を一般女性に伝えようとするナイチンゲールの意思の表れである。「私は女性たちにどのように看護するかを教えようとは思っていない...彼女たちに自ら学んでもらいたい」という序文にも彼女の意図を読み取ることができる。

(5) 以上の知見から、クリミアでの看護現場を経験したことによって、ナイチンゲールは看護を適正に行うための必要なシステムを構築していったことが明らかになった。そしてそのシステムを動かす中心には女性ナースが必要であった。そこにナイチンゲールは、看護だけでなく女性の生き方を示しているように思われる。ここで取り上げた三冊を「女性による看護(職業)」をキーワードとした三部作として読むと、看護が女性の自立を促す専門職であり、そして一般の女性達が家庭での看護を通して自分達で考え、学んでいくことを願っているという一連の流れを見ることができる。クリミア戦争に行く前の著作 *Cassandra* から *Notes on Nursing* までを家庭に縛られた女性が「看護」を契機に自分で思考し行動するという一連の物語を読むようである。その大きな物語の契機となったのがクリミア戦争であるのは間違いのないことである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 山崎麻由美	4. 巻 35
2. 論文標題 「カサンドラ」 ナイチンゲールの専門職確立への使命	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 甲南英文学	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山崎麻由美	4. 巻 16
2. 論文標題 クリミア戦争の看護師たち Margaret GoodmanとSarah Anne Terrotの手記を読む	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 緑葉	6. 最初と最後の頁 33-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山崎麻由美
2. 発表標題 クリミアのミス・ナイチンゲール ナースたちの記録を中心に
3. 学会等名 日本看護歴史学会学術集会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------